二〇一九年度　入学試験問題

法学部A方式Ⅱ日程・国際文化学部A方式・キャリアデザイン学部A方式

二限　国　語　（60分）

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

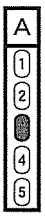
四　問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

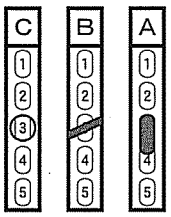
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はＨＢの黒鉛筆でマークすること（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと）。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

(一)　正しいマークの例



(二)　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

わたしはこれまで、人口減少ということをテーマにした本を二冊書いてきた。長期的な人口減少は、経済的な現象ではなく、資本主義の発展段階に必然的に起きる社会変化だというのが、わたしの立論の骨子である。

２０１２年に安倍内閣は、経済政策の柱として「金融緩和」「財政出動」「成長戦略」を掲げたアベノミクスをスタートさせた。人口減少問題の解消は、市場の縮減に歯止めをかける意味でも、あるいはまた有効労働力の確保の意味でも、経済成長戦略の最重要課題として位置付けられていたと思う。

しかし、[1]人口減少という問題は、本来は経済政策と同列に論じられるものではないのだ。確かに人口減少は、マーケットの縮小や、有効生産人口の減少を伴うので、経済に重大な影響を及ぼす。しかし、経済政策によって、人口をコントロールすることはできない。つまり、人口と経済は、一方向の相関を持っているだけである。デフレ解消のための量的緩和や、景気対策としての公共事業投資といった一連の経済対策や、年金や保険の社会保障対策を講じるように、人口減少に対する対策を講じることはほとんど不可能なのである。

それが、経済的な処方によって解決可能な問題なのではないとすれば、人口減少とは何を意味しているのか。そして、そもそもどんな「問題」なのか。

それを考える前提として、戦後日本の社会構造の変化を頭に入れておく必要があるだろう。消費者物価指数がマイナスに転じた１９９５年以降、今日に至るまでの物価低迷現象を、政財界、マスコミともに、長期デフレと表現している。わたしは、これについては［　X　］だと考えている。もちろん、消費者物価や資産の減価をデフレというなら、それはデフレだろう。しかし、それはあくまで、社会現象を経済的な視点からのみ切り取った評価に過ぎない。今年は野菜が不作なので、キャベツの値段が高騰しているというのとかわりがない。何故不作なのか、その原因は経済学では説明できない。

社会における経済的指数は、その社会内部における総体的変化のただひとつの断面に過ぎない。問題があるとすれば、総体

的変化において、何が本質的なのかということである。その意味で、デフレは現在の社会状況にとって本質的ではないのだ。

では、何が本質的なのか、それを一言で言うなら、文明史的な定常化現象が起きていると言うべきだと思う。

繰り返すが、総供給＜総需要の状態が継続的に続くことがデフレだが、現在起きていることを正確にとらえるためには、単に需給バランスといった経済的な断面を見るだけではなく、社会構造変化の推移を見直す必要がある。

経済の定常化現象と、人口減少、老齢化はひとつながりの問題である。人口減少は経済の基盤である市場そのものの縮小を意味するだろうし、老齢化圧力は社会コストを引き上げるからである。

2 問題はその因果関係にあるだろう。

すでに述べたが、人口減少は、経済に重大な影響を及ぼすことは間違いのない事実だが、経済が人口問題に対して与えられる影響はわずかでしかないのである。その理由は、人口問題と経済問題では、問題が抱えている「時間の幅」が全く異なっているということにある。経済は短期的な損得勘定の問題だが、人口減少は、長期的な文明の発展段階に起きる社会構造変化の結果なのだ。

もし、この仮説が正しければ、デフレ脱却のために人口減少問題を解消するという問題の立て方自体が倒立した頓珍漢なものだということになる。むしろ、人口減少に合わせて、社会構造を変革してゆかなければならないと考えるべきであり、そのことがまた、人口減少に歯止めをかけることにつながるはずである。政治や経済の政策が働きかけることができるのは、市場のメカニズムの調整といったところであって、個人の内面や、長期的な社会構造の変化の前では、ほとんど無力であるといってよい。

少子化の直接の原因は、単純である。それは、結婚年齢が上がったということに尽きる。しかし、なぜ、晩婚化しているのかの原因については、簡単な理由を見つけ出すのは難しい。しかし、それがわからなければ晩婚化に歯止めをかけるような政策は導き出すことはできない。そもそも、個人が、どの年齢で結婚するかということに関しては、政治が介入することは不可能であり、してはならないことである。それこそ、個人の自由であるからだ。

ただ、もし、晩婚化というものが、経済的な事由によるのならば、この世代の所得向上や、子育て家族に対する支援政策を打ち出すことは有効だろう。しかし、それだけでは、晩婚化の歯止めにはならない。その理由を以下に説明する。

晩婚化の理由は、複雑である。様々な要素が絡み合っていることは、想像できる。ひとつ明確なことは、日本の家族形態が権威主義的な大家族から、英米型の核家族へと移行したことである。この、家族形態の変化は、晩婚化と無関係ではないだろう。

統計指標の中で、戦後の70年間以上にわたって一方的に上昇、あるいは下降しているような経済指標と、上昇や下降を繰り返す指標とでは、意味するところのものが全く異なる。

株価も消費者物価指数も就業率も、そのときどきの社会情勢によって変化している。それらは、需給バランスや心理的な要因によって変動する指標である。

対して、寿命や、一世帯あたりの人数(減少へ)や、結婚年齢(上昇へ)は、一方的な趨向性を持った指標である。そこに、コンビニエンスストアの総数や、自動車台数や、テレビの普及を加えてもよいかもしれない。これらの一方的な変化は、戦後日本における近代化、市場化の進展を表現している。科学の進歩というものが後戻りしないように、市場化の進展も後戻りすることはない。科学も市場も、既存の達成の上に、レンガを積むように進化する。株価のように、需給動向や心理的な要因、為替の国際情勢によって乱高下するようなものとは位相が異なっている。これを混同するから、政治家の発言のように「こうすれば、ああなる」といったような直線的な「傾向と対策」[3]になるのだ。

結婚年齢の上昇は、戦後の家族形態の変化(権威主義大家族から核家族へ)および、市場化の進展と密接な相関を持っているというのがわたしの仮説である。正確に言うなら、市場化の進展こそが、家族形態の変化をもたらす要因になったということであり、市場化と核家族化は、結婚して家族を作ることがあたりまえだった日本人の家族観を変更させることになった。お金さえあれば家族に頼らずとも、自由に生きていける時代になったということである。家族は、人が生きていくうえでの、安全保障だったが、市場化の進展によってお金こそが安全保障であると多くの人が考えるようになったのだ。

逆に言うなら、権威主義のしがらみから自由になった個人が活躍する場が、市場化の進展によって確保されたということである。市場化こそ、日本の民主主義の進展を後押ししたとも言えるが、その意味では、晩婚化は自由と発展の代償であるといえるだろう。

市場化とは、無縁化でもあり、有縁の共同体のモラルが及ばない場の拡張を意味する。ひとびとは、結婚を忌避して晩婚化したわけではない。むしろ、家族をふくめた有縁の共同体から、自らすすんで逃走しているのだ。その結果として、有縁の共同体である日本の権威主義的な直系家族も解体されていった。

もうひとつの理由は、これと関係があるのだが、消費社会の進展によって、結婚というものを損得で考えるというモラルが定着していったというところにある。主婦業というものが、損得勘定だけで考えれば合わない職業であると考える若者が増えている。損得勘定だけを考えるなら、結婚して子どもをつくり、学費や食費がかさむのは、割が合わないということになるのかもしれない。

いずれにせよ、結婚年齢の上昇とは、戦後日本の発展(無縁化・市場化)の帰結であるということになる。

わたしは、結婚年齢上昇に対する対策として、日本的な権威主義的な直系家族に戻れと主張するつもりはない。そうしようと思っても、それはできない相談である。

ただ、結婚を割の合わない主婦業の選択というような、損得勘定のモラルは、変わり得る可能性がある。

もし、晩婚化から早婚化へのベクトルの転換が難しいとするならば、少子化対策として可能な政策はひとつしかない。それは、結婚していなくとも子どもが産める環境を作り出す以外にはないだろう。

(平川克美「人口減少がもたらすモラル大転換の時代」より。文章を一部改変した)

問一　傍線部1「人口減少という問題は、本来は経済政策と同列に論じられるものではないのだ」とあるが、筆者はそれをどのような視点から論じるべきだと考えているか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　人口減少を解消するための政策に経済の定常化現象という考え方を導入することによって、デフレ脱却を果たそうとする視点。

イ　戦後日本の市場化という社会構造の変遷に着目し、親世代の所得の向上や子育て支援などにその知見を活かそうとする視点。

ウ　戦後日本の社会構造変化の推移を改めて検討し、家族形態の変化という現象と併せて人口減少問題を考えようとする視点。

エ　文明史的な定常化現象を視野に入れ、そこから人口減少による市場の縮小に歯止めをかける方策を見出そうとする視点。

オ　人口減少を文明の発展段階に起きる社会構造の変化ととらえ、戦前の家族形態を手本に対策を講じていこうとする視点。

問二　空欄 X に当てはまる語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　まゆつば物　　イ　後知恵　　ウ　卓見　　エ　面従腹背　　オ　言い得て妙

問三　傍線部2「問題はその因果関係にあるだろう」とあるが、筆者が正当と考えている「因果」について、a原因とb結果として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　文明史的な定常化現象　　イ　社会保障費の増加　　ウ　市場の拡大　　エ　人口減少　　オ　金融緩和

問四　傍線部3「傾向と対策」とあるが、筆者がこの言葉にカギカッコをつけたのはどのような意図があると考えられるか。それを示す語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　喝破（かっぱ）　　イ　忖度（そんたく）　　ウ　欺瞞（ぎまん）　　エ　阿諛（あゆ）　　オ　揶揄（やゆ）

問五　つぎの中から、本文で述べられている筆者の考えと合致しているものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　人口問題と経済状況は一方向の相関性を持っているにすぎないため、人口減少を解消するためには、市場のメカニズムそのものを変革していかなければならない。

イ　デフレが現在の日本社会にとって本質的な問題ではないといえるのは、20年間の推移という長期的な視野で見れば、必ずしも物価が低迷しているとは考えられないからである。

ウ　晩婚化の原因を突き止めるためには、社会情勢の変化と、それに伴う需給バランスや心理的な要因による統計指標の変動を視野に入れて考えることが必要である。

エ　価値観の変容を伴う日本社会の不可逆的な変化によって、お金があれば自由に生きていけるようになったことと、戦後日本の家族形態の変化との間には、密接な関係がある。

オ　結婚は割が合わないと考える若者が増えているのは、彼らが直系家族という共同体からの干渉を嫌い、そこから逃走したいと考えるようになったからである。

問六　筆者は、現代日本の人口減少はどのようにして起こったと考えているか。本文全体の内容を踏まえ、四十字以上、五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

僕は普段Twitterで自分に関する言及を検索しているのだが、だいぶ前のもので、気になっているツイートがある。それは、「千葉は散文を恐れている」というものだ。真意はわからない。が、僕なりに受け止めて、これは図星を突いていると思った。散文というのは、韻文すなわち詩歌ではない、普通の文章のことである。僕は普通の文章がうまく書けない。というのは、言いたいことを端的に、的確に伝えるために書くというだけのことができない、という意味である。僕にはそういう自覚がある。普通の文章を「恐れて」もいる……言われてみればそうかもしれない。だがそれは、いったいどういう恐れなのだろうか。

[1]余計な何かをしている。言いたいことを言う以上の何かにこだわっている。意味以上の何かにかまけている。僕は、言葉を「物質的に」、「造形的に」取り扱っている。言語の物質性——それが気になって、意味に集中できない。言い換えればそれは、僕の言語感覚においては、非散文的な、つまり、詩的なものの比重が高いということなのだろうか。言語の物質性は、詩の本質である。

幼少期から僕は、絵を描いたり、ピアノを弾いたりするのが好きだった。視聴覚的な「イメージ」が重要だった。中学までは美大に進むつもりで、批評や思想に興味が移ったのは高校に入ってからである。もともと僕は、かたちが面白いとか音が気持ちいいといった快楽が先で、意味は二の次だった。広い意味での(視聴覚、触覚などの)イメージをいじる楽しみによって生きていた。

大学に入ってからは、努めてそうした元来の「イメージ志向」を弱め、「意味志向」になろうとした。その訓練はだいぶ時間がかかった。当初、僕は課題のレポートをＤＴＰ*ソフトで縦書きでレイアウトしていた。浅薄なことに、見栄えを良くすることが内容よりも優先だったのである。その段階を脱し、Word*で、そっけない横書きのレポートを書くようになったのは確か大学3年のときだった。

しかしその後も、言葉の並びの視覚的な調整に悩まされ続けた。字が長く連続すると美しくないので、つい読点をたくさん

打ってしまう。漢字とひらがなの割合(黒さと白さの割合)を気にして、言葉選びに汲々とする。ワープロの横幅ちょうどの長さで文が終わるのが嫌で、それより短くなるか、次の行にまたぐように、内容を多少変えてでも言葉を削ったり足したりする、などなど。

これまでは、最初のドラフト(草稿)の段階から視覚的な美しさを気にしていた。意味の伝達と「視覚的完成」を両立させようと最初から苦心していた。だが、それはもうやめるべきなのだ。

聴覚的イメージをどうするかは韻文の古来の問題だが、僕の場合、それが書くときの邪魔になっている感じはしない。視覚的イメージのほうが僕にとっては重要で、それが意味への集中を邪魔している。

これまではWordで書いていて、その中途半端な文字組みのもとで細部を気にしていたので、もっと文字組みが美しいワープロを使えばいいのではないか、とまず考えた。egword Universalや、昨年公開されたばかりのstoneでは、印刷されたような美しさで書くことができる。それは確かに気持ちが良い。だがそれでも、細部の悩みから完全に解放されるわけではない——Wordよりはずいぶんましではあるが。

最初のドラフトを書く際には、視覚的な配慮を完全になしにしてしまおう。ならば、ワープロはやめる。プログラミングに使うような単純なエディタ*がいいだろう。エディタは、意味性=「セマンティック」に集中させてくれる。僕の場合は、単純なエディタではなく、執筆向きの機能があるUlyssesというアプリを使うことにしたのだが、そのマニュアルでは、「360度セマンティック」と謳(うた)っている。Ulyssesでは、フォントの種類も、行間も、文の寄せも変更できない。最初から変更できないように設計されている。文章の視覚的な可変性を制限する、「有限化」することが執筆に役立つ、というのがコンセプトのひとつなのだ。

このUlyssesで、入力行が常時画面の真ん中で固定される「タイプライターモード」を使用する。そうすると、入力している現在だけに集中でき、前後を気にしなくて済む。タイプライターモードでは、ただでさえ表示をほとんどカスタマイズできないエディタのなかで、さらに意識が意味志向に有限化されるのである。

ところで、僕は手書きでノートを書くこともあるが、いま、自分の字の美しさにはこだわっていない。これはもとからそうだったのではない。高校の途中までは、製図用のシャープペンで、定規も使って、丁寧なノートを書いていた。理想的な字を書こうとしていた。だが高校2年頃に、それは本質的なことではないと思うようになり、A カト的措置として、丁寧なノートに加え、アイデアメモをあえて雑な字で書く「雑書(ざつがき)ノート」というサブノートをつくり始めた。それからだんだんそのサブノートの書き方が常態化していき、いまでは丁寧にノートを書くことは一切なくなっている。

ラフに手書きをしているときは、文字が躍動し、視覚的ににぎやかなのに、セマンティックに集中できる。なぜなのだろう。思うに、これは単純なエディタの場合とは逆の極端なのではないだろうか――ラフな手書きでは、視覚的なヴァリエーションが過剰なため、かえって視覚性が気にならないのではないか。

文章の見た目の「理想」が、執筆の流れをB ソガイする。イメージの理想＝Xが想定され、そこに向けての微調整を始めて、きりがなくなる。なぜならXは、「不可能なもの」だからである。Xに到達することなど、決してありえない。

ここで僕は、ラカン派*の精神分析を念頭に置いている。

ラカン派では、イメージの次元を「想像的」と、言語＝意味の次元を「象徴的」と呼ぶ。今回考察しているのは、執筆の流れにおいて、想像的な＝イメージの理想が、象徴的なもの＝意味のC レンサを邪魔するという問題である。

想像的な＝イメージの理想から、降りる。そのためには、イメージの次元を縮減するか、あるいは逆に、過剰化してしまえばよい。いっぽうでは、イメージの次元が縮減されているから、［ a ］＝セマンティックに集中できるという状態がある（［ b ］）。他方では、イメージの次元が過剰なので、かえってセマンティックに集中できるという状態がある（［ c ］）。

また僕には、ワープロで執筆中の段階より、ゲラ*になってからのほうが加筆しやすいという感覚がある。それは、イメージ（文字組み）がもう固定されているからだろう。イメージの理想の追求と、意味の問題を一緒に考えなくてよいのである。ところで、先に述べた文字組みが美しいワープロの場合でも、ゲラの作業に近い状態になる。そこで重要なのは、じつは、美しく

表示されるということではない。そうしたワープロは文字組みが美しくなる機構をあらかじめ持っている。というのはつまり、表示形式が基本的に固定されているということであり（多少のカスタマイズはできるが）、イメージの理想に近づくための試行錯誤の余地が少ないのである――だから、安心して書ける。

2 ラカン的な観点からは、文章の視覚的完成の悩みは、ある実存的な不安を反映しているのだと言えるだろう。それは「自己イメージ」の不安である。

我々は直接に自分を眺めることができない。だから、心的発達の過程において我々は、自己イメージを間接的に得るしかない。鏡を使うというのがひとつの方法であり、もうひとつは、何か他者のイメージに似たものとして自分をとらえることである（他者のイメージへの同一化）。しかし、鏡像にせよ、他者のイメージにせよ、様々にヴァリエーションがあり、流動的であって、唯一これこそが自分だ！という決定には至らない。自己イメージ、ないし「想像的なアイデンティティ」は、つねに揺らいでいる。我々はそのことがつねに不安なのである。

文章の視覚的完成の追求とは、自己イメージの理想の追求に等しいのではないだろうか。それは結局、不可能なものを巡り続けることなのだ。想像的なものは揺らいでいる。しかし他方で、我々のアイデンティティは同時に、象徴的なレベルで保証されている――それは「名づけ」である。自己イメージは定まらないが、名前は定まっている。名前とは、存在を示す最小限の意味だ。だが我々はそれだけでは不満である。我々は自らのリアリティを多様に感じており、それらを統合的にイメージしたい。名前といういわば存在の骨に、自己イメージの肉を盛りつけたい。それが、つねにうまくいかないのである。

名前＝骨だけで済ませなさい、とD アキラめを迫るのが、単純なエディタである。他方で、理想がどうでもよくなるくらいにイメージ＝肉を躍動させるのが、ラフな手書きであり、そこでは逆説的に、骨が肉から自由になる（肉がだぶだぶになる）。

「散文を恐れている」というのは、理想的な自己イメージを［ I ］ことを恐れている、ということだ。

課題は、イメージの次元での「我執」から脱して書くことである。それはさらに言えば、文章におけるイメージの戯れをやめることなのではなく、その原理を変えることである――自己のユートピアを目指すためではなく、他のイメージを、他者とし

てのイメージを生成するために書くのである。アイデンティティの不安とは無関係であるような、他者としてのイメージを生成する。それこそが、物質的なものとしての言語に、「創造的に」取り組むことなのではないか。結局のところ僕においては、詩的また美術的なものが自己イメージと強く結びついていたのだと、認めざるをえないと思う。[3]散文化とは、そのことへの批判である。そしてそれが、自分にとっての詩的また美術的なものの変性につながるだろう。

端的なセマンティックを通過することで、他者としてのイメージの生成へ。

（千葉雅也「散文を恐れている」より。文章を一部改変した）

【注】

＊ ＤＴＰソフト　ＤＴＰは desktop publishing の略。原稿の作成・レイアウト、製版の印刷等、出版物の製作作業が行えるアプリケーションソフト。

＊ Word　書体の種類（フォント）の変更・字数や行間の調整等が可能な文書作成アプリケーションソフト（ワープロ）の一つ。後に書かれている egword Universal、stone もワープロ。

＊ エディタ　文字の入力と編集（コピー、貼り付け等）のみ行えるアプリケーションソフト。

＊ ラカン　フランスの精神分析学者（一九〇一―一九八一）。鏡像段階、想像界・象徴界・現実界などの概念を用いて、理論を展開した。

＊ ゲラ　製版した後、出版のための印刷をする前に、原稿に修正を施すためにためし刷りしたもの。

問一　傍線部Ａ～Ｄのカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

問二　傍線部1「余計な何か」とあるが、筆者にとってはどのような行為がそれにあたるか。具体的な例として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　絵を描いたり、ピアノを弾いたりすること。

イ　ＤＴＰソフトを用い、レポートを縦書きでレイアウトすること。

ウ　最初のドラフトを書く際にエディタを使うこと。

エ　丁寧なノートだけでなく、「雑書ノート」というサブノートをつくること。

オ　ゲラに文章を書き加えること。

問三　空欄 a b c にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　a　イメージの理想　b　ラフな手書き　c　ワープロ

イ　a　意味性　b　単純なエディタ　c　ワープロ

ウ　a　象徴的なもの　b　ラフな手書き　c　単純なエディタ

エ　a　イメージの理想　b　ワープロ　c　単純なエディタ

オ　a　象徴的なもの　b　単純なエディタ　c　ラフな手書き

問四　傍線部2「ラカン的な観点からは、文章の視覚的完成の悩みは、ある実存的な不安を反映しているのだと言えるだろう」とあるが、なぜこのように言えるのか。その理由を四十字以上、五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問五　空欄 I にあてはまる言葉をつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　称揚する　　イ　手放す　　ウ　昇華する　　エ　普遍化する　　オ　目指す

問六　傍線部3「散文化とは、そのことへの批判である」とあるが、これは筆者のどのような変化を述べていると考えられるか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　筆者は散文を書く時、意味性への執着によって生じる思考の中断がはからずも文章上に表れていることに気づかされ、Twitterの「散文を恐れている」という自分に対する指摘を適切なものとして甘受した。

イ　自己の存在を「象徴的」に認識するほどの意識がなければ、理想的な散文を書くことができないという考えに行き着き、逆説的に、筆者は、未だに自己の言語感覚において物質性が優位であることをあらためて認知することになった。

ウ　筆者は「物質的」な言語感覚で「想像的」に散文を執筆することに拘ったが、種々の試みを行いながら自分の言語感覚と自己イメージの関係を見直すことにより、「創造的」な執筆に意識を転換する必要性を強く認識することになった。

エ　筆者は言葉を「物質的」に扱う志向を持っており、文章の理想は内容の充実度によるものではなく、視覚上の美しさにあると再発見し、他者に対し、自己イメージが「象徴的」に伝えられていなかったのではないかと改めて反省した。

オ　筆者は「想像的」なイメージの理想の追求が執筆の流れを邪魔するという問題を抱えているため、自己イメージを確立することは不可能だと認識するに至り、散文執筆時にはアイデンティティの鏡像化に取り組むべきであると痛感した。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

いにしへ、ある聖と伴ひ侍りて、越路*の方へ越え侍りき。能登国*いなやつの郡の内に山海交じはりて、殊に面白くおぼゆる所侍り。人里はるかに離れたる巌さがしくて、いたく荒磯なり。よにも心のとどまりておぼえ侍りしかば、暫く休らひて見侍りしに、岸そのこととなくそびえ上がりて、木どもら由ありて生ひて、岩屋のめでたき見ゆめり。a ゆかしさに急ぎ寄りて侍るに、齢四十ばかりの僧、座して侍り。かの岩屋は南向きにてなん、海を前に受け侍り。ことに心も澄みていまそかりげに侍りき。ただ着のまま、帷衣*のほかには、何ものも辺りに見えざんめり。1 なつかしくおぼえて、「いづくの人にかいますらん。所ざま、さこそすみよしと思すらん」と申し侍りしかば、この聖、すこしほほ笑み給ひて、かく、

A* 難波潟むらたつ松も見えぬうらをここすみよしと誰か思はむ

とのたまはせ侍りしかば、何となう哀れにおぼえて、かく、

B 松が根の岸うつ波にあらはれてここすみよしとおもふばかりぞ

と詠みて侍りしかば、この聖もいとをかしげにいまそかりき。

「さても、誰人にてかいまそかるらん。いつもこの所に住み給ふにや」なんど尋ね侍りしかば、「いさとよ、人は月まつしまの聖とこそ呼ばひ侍れ。またいつもここに住むにはあらず。月に十日は必ず来て住むなり。b そのほどはなにも食ひ侍らず」とのたまひ侍りしに、2 あさましくて、さては見仏上人*と聞こえ給ふ人の御事にこそと、忝なくおぼえて、「我をば西行*となん申すに侍り」と、恐れ恐れ申し侍りしかば、「さる人ありと聞く」とのたまはせ侍りき。さてしも侍るべきにあらざりしかば、名残は多く侍りしかども、心留まる法文*など問ひ奉りて、泣く泣く別れ去り侍りき。帰るさには見え給はざりしかば、わざと四日の道を経て松島*へ尋ね参りて、かの寺に二月ばかり住みて侍りき。

X この事げに思ひ出すに、涙のいたく落ちまさりて、書き述べん筆、立つべき所も見えわかず侍るにこそ。この松島の有様もゆかしく、静かにして心も澄みぬ*べきを振り捨てて、多くの海山を隔てて、はるばる能登の境までいまそかりて、松風に付け

いとど思ひをまし、寄り来る波に澄める心を洗ひ給ひけんほど、いといさぎよくおぼえ侍り。身にしたがへる人もつかず、命を助くる糧をも調べ給はで、十日の間住み渡りておはしけん心の内の貴さは、並ぶるものやは侍る。せめて春夏のほどは、いかがせん、冬の空の、越路の雪の岩屋の住まひ思ひやられて、[3]そぞろに涙のしどろなるに侍る。いかなれば、人の同じ心おこしながら、[Y]山を隔つるまでに変はるらん。

（『撰集抄』より）

【注】

＊ 越路　北陸道。現在の北陸地方。
＊ 能登国いなやつの郡　現在の石川県の地名。
＊ 帷衣　裏地のない薄い衣。
＊ 難波潟　歌枕。現在の大阪市の海で、松の名所として知られる住吉があった。
＊ 見仏上人　松島に住んでいた平安時代末期の僧。
＊ 西行　平安時代末期の遊行僧・歌人。
＊ 法文　仏法を説いた文。
＊ 松島　現在の宮城県の地名。

問一　傍線部1「なつかしくおぼえて」2「あさましくて」3「そぞろに」の本文中の意味として、最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

1「なつかしくおぼえて」

ア　昔を思い出して　　イ　以前会ったと思って　　ウ　親しみを覚えて

エ　神秘的に感じて　　オ　穏やかな気持ちになって

2「あさましくて」

ア　驚いて　　イ　気後れして　　ウ　感激して

エ　苦々しく思って　　オ　悲しく思って

3「そぞろに」

ア　にわかに　　イ　少しずつ　　ウ　際限なく

エ　わけもなく　　オ　不安そうに

問二　二重傍線部a「めり」b「なり」c「ぬ」の文法上の意味として、最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。ただし、同じ記号を何度選んでもよい。

ア　打消　　イ　受身　　ウ　尊敬　　エ　過去　　オ　推定

カ　可能　　キ　意志　　ク　断定　　ケ　伝聞　　コ　強意

問三　波線部A・Bの二首の和歌の説明として、最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　両歌は、能登の海岸から見える松のすばらしさを讃えている。

イ　両歌は、松島と能登のすばらしさについて論争している。

ウ　両歌は、再会を待ちわびていた思いを吐露しあっている。

エ　両歌は、この地の過ごしやすさについて感慨を述べている。

オ　両歌は、松にふさわしい風景を思い浮かべている。

問四　傍線部X「この事げに思ひ出すに、涙のいたく落ちまさりて」とあるが、書き手は誰が何をしていることに感嘆しているのか。つぎの形式にしたがって二十字以上、三十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

□こと。

問五　つぎの文は、傍線部Y「山を隔つるまでに変はるらん」の文意をまとめたものである。空欄①・②に入る最も適切な語を後の選択肢の中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

この文は、〔　①　〕の〔　②　〕に大きな違いがあることを述べている。

①　ア　見仏上人と月松しまの聖　　イ　見仏上人と西行　　ウ　見仏上人と俗世の人びと
　　エ　西行と能登の人びと　　オ　西行と松島の人びと

②　ア　過去に固執しない心　　イ　風流を愛する心　　ウ　歌道を解する心
　　エ　友を大切にする心　　オ　仏道を追求する心

問六　つぎの中から、本文の内容と合致するものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　見仏上人は西行のことを聞き知っていたが、和歌を詠み交わした時が初対面であった。
イ　見仏上人は西行から月まつしま上人と呼ばれていたが、本人もそのことを知っていた。
ウ　見仏上人は常に旅を続けているため、西行に一度しか会うことができなかった。
エ　見仏上人は松島を疎んじていたため、月の十日間は能登で過ごすことを決めていた。
オ　見仏上人は松島の穏やかさに甘んじることなく、新たな修行場所を探し求めていた。